

エルザ 痴漢捜査で蟹股即落ち

魔導師ギルド“妖精の尻尾”に所属する最強の女魔導師、エルザ。

彼女のもとに、一人の女性から依頼が届いた。

ある鉄道車で移動中、痴漢に遭ったのだという。

そして“誘惑”に似た魔法で一時的に痴漢に対する嫌悪感を失われ、むしろ受け入れさせられ、陵辱の限りを受けた……

そんな凶悪な痴漢を退治してほしい……通常の方法では届出しにくいために直接依頼されたこの仕事を、エルザは二つ返事で引き受けた。

(卑劣な輩、すぐさま始末せねば。……しかし、まるで“痴漢捜査”だな……)

エルザは厳格な性格だが、意外にも成人向けの小説を好む。

最近ハマっているものの内、女捜査官ものを思い出し……服はいつもの私服ながら、気分だけは女捜査官になりきっていた。

(もっとも、小説のように無様な快樂落ちなどゴメンだがな。……っ！)

気分は小説の主人公……とはいえ、ポルノ作品のように痴漢に屈服するわけにはいかない。

集中して囃役を初め、僅か数分。エルザが持つ美貌に釣られたか、早速痴漢がエルザの尻をスカート越しに触った。

敵の魔法はこういった犯罪に使われやすい、“誘惑”に類似するものだろう。ならば対処も容易だ。

精神を強く保ち、魔法と敵を認識。そして用意していた手錠を犯人の手に――

引っかけようとした直前。エルザは唐突に、香水のようなものを吹きかけられる。

(霧吹き?! まさか毒か? ただの痴漢がそんなものを……いや、これは……っ！)

不意を突かれたために香水を吸ってしまったエルザ。危険な毒のようなものかと思ったが、すぐに成分を把握する。

そして同時に身体の力が抜け、胎の底から全身が熱くなっていくのを感じる。

(こ……これは……! 私がいつも使っている、媚薬……?! マズい……よりによって、これは……っ♥)

いっばしの女であるエルザ。ポルノ小説だけでなく、魔法薬の一種……媚薬も嗜んでいた。

中でもエルザの体質によく効くものがあり、それを愛用しているのだが……偶然か意図されてか、

痴漢が吹きかけてきたのは、まさにエルザ御用達のものだったのだ。

常用しているだけに、その効果は早く、強く利いてしまう。

この媚薬をスイッチとしているエルザは完全に戦闘不可能な域まで脱力してしまい、更に一瞬にして激しい性的興奮状態に陥っていた。

(偶然……なのか? いや、今はそんなことはどうでもいい! 早く、手錠を……あっ♥)

考える暇はない。危機的状况に、エルザが出来ることは犯人に手錠をかけることだけ。

しかし力が緩んだ隙に手錠は奪われ、逆にエルザの手と吊革が拘束されてしまう。

最強の女魔導師も、こうなってはただ吊革を握るだけの乗客でしかない。

そして青いミニスカートの上から、熟れた美尻を揉まれる。媚熱に出来上がった身体は一瞬で牝として反応。快感で打ち震えてしまうのだった。

(そんな……っ♥ 私が……こんな、単純な手で……♥)

頻繁な自慰により、エルザの感度は高い。媚薬で更に敏感になった尻肉を、揉まれた刺激で震わせながら思案する。

痴漢の手口は単純ながら、あまりにも周到すぎる。この地で名を馳せて有名になったエルザのことを、あらかじめ調べていたのだろうか。

もしかすれば、依頼主もグルなのかもしれない。エルザをハメるために嘘の依頼でおびき寄せ、対エルザ特化の準備で随とす算段なのだろうか。

いろいろ考えるが、もう遅い。思考も快樂に呑みこまれ、ただ触られるだけで快樂の頂が見えてきていた。

(いかんっ……このままでは、本当に……っ♥ 落ち着け……! 痴漢に屈するなど……あつてはならない……っ！)

と、そこでエルザの精神力が真価を発揮。脅威的な精神力で、媚薬の快樂と痴漢の愛撫テクニックを押し返す。

(そうだっ……! 痴漢に屈するなど……)

ぎゅむっ♥

(あっ♥ あつては♥ ならないっ♥)

快感を抑え込んだ……そう思えた瞬間、痴漢の手が胸にも到来。巨乳に服の上から指を埋め込まれ、巧みな愛撫が再び快樂を押し上げてくる。

このままでは、痴漢のような卑劣漢に絶頂させられてしまう。女として、魔導師として、ギルドの代表格として、それだけは防がなければならない。

エルザは最後の精神力を振り絞り、尻と胸の快樂を堪え――

(痴漢ごときにっ♥♥ 負けるはずがないっ♥♥)

くりっ♥♥

「負けっ♥♥♥ んおおおおっ♥♥♥」

その直後、更に陰核が摘まみ上げられる。乳尻の二点責めでさえ限界だった状態で、不意な牝秘部への刺激。

無防備な場所への刺激をまともに受けたエルザは、強烈な肉悦を堪えることなどとてもできず……

あまりもの快感で遂に屈し、車両内にも関わらず牝の啼き声を上げるのだった――

◆ 痴漢捜査、二日目。

エルザは無様に痴漢屈服した様子を撮影されていた。

それをネタに脅迫され 再び同じ車両に乗るよう指示されたのだ。

(この私が脅迫されるとは……なんという屈辱……！ だが、痴漢を捕えるチャンスだ。私を招いたことを後悔させてやる……！)

先日の屈辱を晴らすため、エルザは再び痴漢鉄道へと乗り込む。

(っ?! こ、この感じ……まさか……)

……そして、再びあの媚薬の効果を受けてしまう。

おそらくエルザの魔力に反応して嘔き出るように仕込んでいたのだろう。防ぎようがない奇策にまんまとハマリ、またも発情状態と化してしまう。

(あっ♥ ま、またっ……♥)

全身の力が緩んだ隙に、一瞬にして痴漢に接近される。また手錠で拘束され、吊革を握り続けることを強いられた。

そして無防備な尻を撫でられ、揉まれ、痴漢されているという背徳感、愛撫による刺激で呆気なく“絶頂我慢”の状態に追いやられる。

(くっ……こんな、簡単に……っ♥ それに、こいつの手付きっ……♥ やはり……監視していたのか……?)

痴漢は尻を愛撫しつつ、時折スカートを捲ろうとする仕草をとる。そしてその度にエルザは快感とは別の問題で焦りが生まれる。

今日、エルザの着下はいつも着用している、機能性重視で地味なものではない。装飾過多なセクシー仕様……勝負下着だ。

よりによって痴漢には見られたくないものを着用している……それを知っているのか、痴漢は愛撫よりもスカートめくりのような動作が増えていく。

(……………違うんだ……♥ これは……たまたま、他の下着が洗濯中で……♥ ああっ♥ やめろっ♥ パンツを見るなあっ♥)

頭の中で言い訳し、それが更に恥辱感を増す。

【勝負下着で痴漢されるとか……】

【本当は痴漢されるの期待してた?】

そんな痴漢の声が聞こえてきそうで……いや、そう思われているに違いない。痴漢の魔法の影響か、本当の声とも幻聴ともつかぬ言葉責めに翻弄される。

(ち、違うっ♥ 誰が……期待などお……♥)

【媚薬対策なんていくらでも出来るはずなのに】

【そもそもエロ本と媚薬を買ってる時点で……】

(そ、それはっ……♥)

精神が追い詰められ、魔力すら脆くなっていく。痴漢はその隙を逃さなかった。

なんとエルザの魔法に干渉し、換装——装備の変更を強制させたのだ。

(なっ?! や、やめろっ♥ 見るなあっ♥)

上下の服が、ゆっくりと魔法空間へと収納される。じわじわと薄れていき……遂に消失。エルザは車両の中、あろうことか下着姿にされてしまう。

淫靡な模様の入った黒レース。明らかに性的に興奮している時に着用すべきものだ。

そんなものを着ていると知られ、屈辱、羞恥……そしてそれに比例する被虐欲が湧きたってくる。

(やめろっ♥ 見るなっ……あああっ♥)

妖精女王の勝負下着姿、見るなど言う方が無理がある。

全身に視線を感じ、更に勝負下着を見て興奮したか、荒くなった痴漢の愛撫が、自慢の胸と尻に襲いかかる。

【本当にエロ下着で来るとか……しかももう濡れてるし】

(ぬ、濡れてなどっ♥ んおっ♥ さ、触るなあっ♥)

秘部——陰唇への愛撫はまだ受けていない。にも関わらず既に濡れそぼっており、エルザが如何に興奮しているかを示していた。

(やめろっ♥ やめろっ♥ あああっ……また、撮られている、はずなのに……汽車の中で……こんな姿で……っっ♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で!